

Vol. 79
Oct 31, 2026

ORGANIC GEOCHEMISTRY

Newsletter

CONTENTS

REPORT 3

2025–2026 年度定時総会報告 3

1. 第 1 号議案：2025 年度事業報告 3
2. 第 2 号議案：2025 年度会計報告 3
3. 第 3 号議案：2026 年度事業計画 5
4. 第 4 号議案：2026 年度会計計画 5
5. その他の報告事項 6

INFORMATION 7

有機地球化学賞（学術賞）受賞者決定のお知らせ 7
研究奨励賞（田口賞）受賞者決定のお知らせ 11
2026 年度年会費納入のお願い 13

EDITOR'S NOTE 14

REPORT

2025–2026 年度定時総会報告

2026 年 8 月 6 日（木）13 時 30 分より、一般社団法人日本有機地球化学会 2025–2026 年度定時総会がオンラインにて開催された。総会には会員 21 名が出席し、委任状提出者 28 名と合わせて 49 名となり、定款に定める定足数（議決権を有する会員 121 名の 5 分の 1 以上）を満たしたことから、総会の成立が確認された。

本総会では、2025 年度事業報告、2025 年度会計報告、2026 年度事業計画および 2026 年度会計計画の 4 議案について審議が行われ、すべての議案が承認された。 以下にその概要を報告する。

1. 第 1 号議案：2025 年度事業報告

2025 年度の主な事業として、以下の活動が報告された。

- 第 42 回有機地球化学シンポジウムの開催（2025 年 11 月 4〜5 日、千葉）
- 2025 年度定時総会および理事会の開催
- 学術賞および田口賞受賞候補者選考委員会、ROG 編集委員会、記念事業・マニュアル編集委員会、将来計画委員会等の活動
- 日本地質学会第 132 年学術大会（熊本）の共催
- ニュースレターNo. 78 および *Researches in Organic Geochemistry*（ROG）Vol. 41 の刊行
- 賛助会員およびシンポジウム協賛の勧誘、会員管理、会計処理、ホームページの更新等の事務局業務

以上の事業報告について審議が行われ、承認された。

2. 第 2 号議案：2025 年度会計報告

2025 年度（2025 年 7 月 1 日〜2026 年 6 月 30 日）の会計決算について報告が行われた。一般会計の収入総額は 449,347 円、支出総額は 259,483 円であり、当該年度の収支差額は 189,864 円の黒字となった。これにより、次年度繰越金は 2,431,646 円となった。田口基金については、収入総額 1,312 円、支出総額 100,290 円となり、次年度繰越金は 744,025 円となった。

また、貸借対照表および正味財産増減計算書についても報告された。2026 年 6 月 30 日時点の資産合計は 3,178,671 円、負債合計は 3,000 円、正味財産合計は 3,175,671 円であった。

会計監査の結果、会計処理および財務諸表の記載が適正であることが報告された。

以上の会計報告について審議が行われ、承認された。

〔表 1：2025 年度収支決算書〕

2025年度一般会計		2025年度予算	2025年度決算	差(決算-予算)	備考
収入	賛助会費	¥160,000	¥140,000	−¥20,000	6社7口
	個人会費(2025年度分)	¥309,000	¥257,154	−¥51,846	納付率83%(金額ベース)
	個人会費(2024年度以前)	¥81,000	¥49,000	−¥32,000	
	シンポジウム収益	¥50,000	¥1,112	−¥48,888	千葉シンポジウム
	利子等	¥850	¥2,081	¥1,231	
	計	¥600,850	¥449,347	−¥151,503	
負債扱い	個人会費(2026年度以降先払い分)	¥0	¥3,000	¥3,000	
支出	印刷製本費	¥140,000	¥92,400	−¥47,600	Vol. 41, Issues 1, 2
	HP維持費	¥32,000	¥31,438	−¥562	
	事務局経費・雑費	¥20,000	¥52,485	¥32,485	司法書士代金含
	学会年会費	¥10,000	¥10,000	¥0	JpGU
	税金	¥71,578	¥73,160	¥1,582	法人税・源泉徴収税
	計	¥273,578	¥259,483	−¥14,095	
	2025年度収支(収入総計—支出)	¥327,272	¥189,864	−¥137,408	
	当初資金	¥2,241,782	¥2,241,782		
	次年度繰越金額	¥2,569,054	¥2,431,646	−¥137,408	
2025年度田口基金		2025年度予算	2025年度決算		
収入	利子	¥600	¥1,312	¥712	
	計	¥0	¥0	¥0	
	総計	¥600	¥1,312	¥712	
支出	副賞	¥50,000	¥100,000	¥50,000	受賞者2名
	振込手数料		¥290		
	計	¥50,000	¥100,290	¥50,000	
	当初資金	¥843,003	¥843,003		
	次年度繰越金額	¥793,603	¥744,025	−¥49,578	

〔表 2：2025 年度貸借対照表〕

貸借対照表
一般社団法人日本有機地球化学会
令和8年7月1日現在(単位:円)

科目	令和8年度	令和7年度	増減
[資産の部]			
【流動資産】			
通常貯金	1,042,562	1,159,990	−117,428
定額貯金	0	0	0
郵便振替貯金	1,354,016	1,066,750	287,266
PayPal預金	38,068	24,042	14,026
PayPay銀行預金	744,025	843,003	−98,978
流動資産合計	3,178,671	3,093,785	84,886
資産合計	3,178,671	3,093,785	84,886
[負債の部]			
【流動負債】			
前受会費	3,000	9,000	−6,000
負債合計	3,000	9,000	−6,000
[正味財産の部]			
【指定正味財産】			
基金	744,025	843,003	−98,978
寄付金	0	0	0
指定正味財産合計	744,025	843,003	−98,978
【一般正味財産】	2,431,646	2,241,782	189,864
正味財産合計	3,175,671	3,084,785	90,886
負債及び正味財産合計	3,178,671	3,093,785	84,886

〔表 3：2025 年度正味財産増減計算書〕

正味財産増減計算書
令和7年7月1日から令和8年6月30日まで
一般社団法人日本有機地球化学会

科目	正味財産	一般正味	指定正味
I. 正味財産増減の部			
(1)経常収益			
年会費			
当該年度年会費	397,154	397,154	
過年度年会費	49,000	49,000	
シンポジウム開催収入	1,112	1,112	
雑収益			
受取利息	3,367	2,055	1,312
手数料差額	26	26	
経常収益計	450,659	449,347	1,312
(2)経常費用			
印刷製本費等	92,400	92,400	
通信運搬費	280	280	
委託費	68,228	68,228	
支払手数料	1,155	1,155	
シンポジウム開催支出	−		
学会年会費	10,000	10,000	
雑費	14,260	14,260	
税金	73,160	73,160	
研究奨励賞賞金	100,290		100,290
経常費用計	359,773	259,483	100,290
当期計上増減額	90,886	189,864	−98,978
正味財産期首残高	3,084,785	2,241,782	843,003
正味財産期末残高	3,175,671	2,431,646	744,025

3. 第 3 号議案：2026 年度事業計画

2026 年度の主な事業として、以下の活動が計画されている。

- 第 43 回有機地球化学シンポジウムの開催
  （2026 年 11 月 6〜7 日、秋田大学、8 日に巡検）
- 定時総会および理事会の開催
- 学術賞および田口賞受賞候補者選考委員会、理事候補者選挙管理委員会、
  ROG 編集委員会、記念事業・マニュアル編集委員会、将来計画委員会等の活動
- 日本地質学会第 133 年学術大会（金沢）の共催
- ニュースレターNo. 79 および ROG Vol. 42 の刊行

以上の事業計画について審議が行われ、承認された。

4. 第 4 号議案：2026 年度会計計画

2026 年度の一般会計予算は、収入総額 496,000 円、支出総額 228,580 円とし、収支差額 267,420 円、次年度繰越金 2,699,066 円を見込んでいる。田口基金については、収入総額 500 円、支出総額 50,145 円を計上し、次年度繰越金 694,380 円を見込んでいる。また、2025 年度会計監査において、PayPal 決済時の手数料変動に伴い生じる過剰分について、雑収入として処理する旨の細則を設け、会員に周知することが提案された旨が報告された。

以上の会計計画について審議が行われ、承認された。

〔表 4：2026 年度収支予算書〕

2026年度一般会計		2026年度予算	2025年度実績	備考
収入	賛助会費	¥140,000	¥140,000	6社7口
	個人会費（当該年度分）	¥319,000	¥257,154	正会員100名，学生会員19名として算出
	個人会費（当該年度以前未納分）	¥35,000	¥49,000	正会員延べ10，学生会員延べ5（2026年7月時点での集計）
	シンポジウム収益	¥0	¥1,112	
	利子等	¥2,000	¥2,081	
	計	**¥496,000**	¥449,347	
支出	ROG費用	¥95,000	¥92,400	
	HP維持費	¥32,000	¥31,438	
	事務局経費・雑費	¥20,000	¥52,485	司法書士代行費用（36790円，2025年度）
	学会年会費	¥10,000	¥10,000	JpGU
	税金	¥71,580	¥73,160	法人税計70000円＋源泉徴収税（1名分）
	計	**¥228,580**	¥259,483	
収支総計		¥267,420	¥189,864	
前年度からの繰り越し		¥2,431,646	¥2,241,782	
年度末資産予測		**¥2,699,066**		
2026年度田口基金	予算	2025年度予算	2024年度実績	
収入	利子	¥500	¥628	
	総計	¥500	¥628	
支出	副賞	¥50,000	¥100,000	1件と想定
	振込手数料	¥145	¥290	
	計	¥50,145	¥100,290	
収支総計		**−¥49,645**	−¥99,662	
前年度からの繰越金額		¥744,025	¥843,003	
次年度繰越金額		**¥694,380**	¥744,025	

5. その他の報告事項

5.1. 2026 年度学会賞受賞者

2026 年度の研究奨励賞（田口賞）受賞者として、Raman Umamaheswaran 氏（海洋研究開発機構）、有機地球化学賞（学術賞）受賞者として、山下洋平氏（北海道大学）が報告された。

両受賞者の研究業績および受賞コメントについては、本号の別記事に掲載する。

5.2. 第 43 回有機地球化学シンポジウム

第 43 回有機地球化学シンポジウムは、2026 年 11 月 6 日（金）～7 日（土）に秋田大学手形キャンパスにて開催される予定であることが報告された。また、11 月 8 日（日）には巡検が予定されている。

5.3. ROG 編集委員会

ROG 編集委員会より、Vol. 42 の編集状況、Supplementary Information の公開における J-STAGE Data の活用、受賞記念論文の掲載に向けた取り組み、および編集委員の更新予定等について報告が行われた。

INFORMATION

有機地球化学賞（学術賞）受賞者決定のお知らせ

2026 年度有機地球化学賞（学術賞）について、例年どおり学会公示により選考候補者の推薦を 4 月 30 日に募集した。当初の応募締切日 5 月 29 日までに、1 件の候補者の推薦があり、その後、有機地球化学賞（学術賞）選考委員会によるオンライン会議およびメール会議により審査を行った。その結果、候補者は、有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいという結論に至り、山本会長に答申した。その後、7 月 13 日の理事会で、理事からの意見を踏まえ、会長が受賞者を決定した。

氏名：　　山下 洋平（ヤマシタ　ヨウヘイ）

所属・職名：　国立大学法人 北海道大学　准教授

研究題目：　水圏における難分解性溶存有機物の起源および動態に関する研究

業績：　　査読付き国際誌 94 編，国内誌 5 編，その他報告書等 3 編

受賞理由

山下洋平会員は、大学院修士課程以来、一貫して水圏に存在する難分解性溶存有機物の起源、生成、輸送および除去過程に関する研究を推進し、有機地球化学および水圏炭素循環研究の発展に大きく貢献してきた。特に、海洋溶存有機物の蛍光特性を利用した研究において国際的に高い評価を受けている。

修士課程では、海洋溶存有機物中の結合型アミノ酸に着目し、分解に伴うアミノ酸組成の系統的変化を明らかにした。また、タンパク様蛍光がチロシンおよびトリプトファンに由来することを示した。博士課程以降は、腐植様蛍光を有する溶存有機物（FDOMvis）の研究を発展させ、太平洋深層における FDOMvis と見かけの酸素消費量の強い正の相関から、微生物活動に伴う難分解性溶存有機物の生成を明らかにした。この成果は Nature Geoscience に掲載され、海洋炭素循環研究に大きな影響を与えた。その後も、日本海やオホーツク海、北太平洋等における FDOMvis の蓄積・長距離輸送機構や、鉄の輸送に果たす役割を明らかにするとともに、蛍光分析と PARAFAC を組み合わせた手法を用いて、溶存有機物の起源や機能に関する研究を発展させた。

近年は、熱成の難分解性溶存有機物である溶存黒色炭素の研究を精力的に展開し、沈降粒子への吸着による除去過程や、深海熱水系が重要な供給源であることを明らかにした。これらの成果は Nature Communications および Science Advances に掲載され、海洋における熱成炭素循環の理解を大きく前進させた。現在は大気エアロゾルや堆積物にも研究対象を広げ、地球表層の炭素循環の総合的理解に取り組んでいる。

これらの成果は、徹底したフィールド調査と精緻な有機地球化学分析に基づくものであり、94 編の査読付き国際誌論文の公表や積極的な国際共同研究を通じて、本分野の発展に大きく貢献してきた。以上の独創的かつ先駆的な研究業績から、山下会員は有機地球化学賞（学術賞）受賞者として相応しいと判断された。

山下会員からのコメント

この度は、栄誉ある有機地球化学賞（学術賞）を受賞し、大変嬉しく思います。ご推薦ならびにご選考いただきました会員の皆様に、心より感謝申し上げます。今回の受賞では、これまで私が一貫して取り組んできた「溶存有機物」に関する研究を評価していただきました。海外の大きな学会では、溶存有機物に関連する複数のセッションが設けられる一方、日本国内ではこの分野を専門とする研究者は決して多くありません。そのような環境の中で、私が何に影響を受け、何を考えながら研究を続け、今回の受賞につながる成果を得ることができたのか、これまでの研究生活を振り返ってみたいと思います。

溶存有機物に関する研究は、名古屋大学大学院に進学し、田上英一郎教授のご指導の下で始めました。私が修士課程に在籍していた当時、田上研究室は大気水圏科学研究所にありました。大気水圏科学研究所には学部生がいないため平均年齢が高く、研究を精力的に行う雰囲気に満ちていました。そのような環境で大学院生として研究活動を開始できたことは、今振り返っても非常に良かったと思います。田上研究室では、研究テーマは教員と相談しながら決めるものの、実際の研究は学生が主体となって進め、教員との議論を通して主テーマを変更することもできる、というスタイルでした。田上先生は、とてもオープンな先生で、学生の考えにもよく耳を傾けてくださいました。今では考えにくいことですが、タバコを吸いながら、時にはお酒を飲みながら、長時間にわたって議論に付き合ってくださったこともありました。田上先生との議論を通じて海洋溶存有機物研究の歴史や最先端の研究に触れることができたことは、その後の私の研究者人生において極めて貴重な財産となりました。では、大学院生の頃に何を考えて研究していたのか。振り返ってみると、当時はとにかく「自分の名前が付くような新指標を提案したい」と考えて研究していました。実際に提案した指標は、堆積物中のアミノ酸の分解を示す指標を溶存有機物向けに改良したものでしたが、残念ながらほとんど使われていません。一方で、その研究と同時に発表した、溶存有機物中の芳香族アミノ酸濃度とタンパク質様蛍光強度との関係を見出した論文は、世界で初めてこの関係を示した研究として多くの研究者に知っていただき、多く引用される代表的な論文の一つとなりました。

学位取得後は、田上研究室で日本学術振興会特別研究員として約 1 年半、さらに研究員として約 1 年間研究を続けました。その間、研究を進める一方で、国内の大学・研究機関のポジションにも数多く応募しました。しかし、ほとんど面接に進むこともなく、将来について非常に不安を感じていました。そのような時、学会でお会いした Rudolf Jaffé 教授から、フロリダ国際大学でのポスドクの話をいただきました。迷うことなくその機会を受け、フロリダ国際大学で研究生活を始めることになりました。前任者である眞家永光博士（現・

北里大学獣医学部教授）の後任として、眞家博士が取り組んでいた三次元励起蛍光光度法とParallel Factor Analysisを組み合わせた解析手法（EEM-PARAFAC）を用いて、さまざまな水圏における溶存有機物の動態を評価する研究に取り組みました。ポスドクの契約は 1 年ごとの更新でした。渡米当初はアメリカでの生活にも慣れておらず、また成果を出さなければならないというプレッシャーもありました。しかし、眞家博士に紹介していただいた米国人のルームメイトにも大変よくしてもらい、幸運にもEEM-PARAFACを用いた研究成果を比較的早く論文化することができました。このことは、米国でのポスドク生活を軌道に乗せる上で非常に大きかったと思います。Jaffé 先生や研究室のメンバーとの関係にも恵まれ、研究に集中できる米国での生活がすっかり気に入り、結果として 3 年弱にわたるポスドク生活を楽しむことになりました。米国でのポスドク時代は、初期を除けば大きなプレッシャーを感じることも少なく、研究を含めた米国での生活を楽しみながら、多くの論文を書くことに力を注いでいました。渓流、大河川、沿岸域、外洋域と、さまざまな環境を対象として EEM-PARAFAC を用いた溶存有機物の動態解析を行った経験は、その後、陸域から深海までを対象としたボーダーレスな研究を展開する上で、大きな基盤となったと思います。また、米国滞在中に同年代の研究者と交流できたことは、大きな刺激となりました。現在でも交流が続く仲間と出会えたことも、米国滞在で得た大きな財産の一つです。

米国でのポスドク期間中、北海道大学大学院地球環境科学研究院の准教授ポジションに応募し、幸運にも採用していただきました。その後は、北海道大学で溶存有機物に関する研究を継続しています。北海道大学では、同僚や研究者仲間に非常に恵まれました。さまざまな研究者との交流を通して新しい考え方や分野に触れる機会が増え、それまであまり縁のなかった大気や海底などを対象とした新しい研究にも取り組むことができました。また、多くの大型プロジェクトや大型研究航海にも参加させていただき、多様な共同研究を展開する機会にも恵まれました。そして何より、学生にも恵まれ、学生と一緒に多くの研究成果を生み出すことができていることを大変ありがたく感じています。最近では、このような恵まれた環境に感謝しながら、自分だからこそできる、独自性の高い研究が展開できるように心がけています。また、自ら研究を行うだけでなく、プロジェクトや研究航海を主導する立場へと少しずつ移行してきました。研究に割ける時間や研究の進め方は若い頃とは大きく変わりましたが、これまでとはまた違った立場で新しい研究を展開できることを楽しんでいます。

これまでの研究生活を振り返ると、本当に良いタイミングで良いテーマに取り組むことができ、研究者として非常に「運」が良かったと思います。一方で、その「運」を掴むことができた背景には、自分なりに続けてきたこともあったのではないかと思います。論文を書き続けたこと、若いうちに多くの時間を研究に費やして経験値を高めたこと、そして、人とのつながりを大切にしながら研究を進めてきたことです。現在は、研究以外で多忙になることも増え、若い頃ほど長時間研究に集中することは難しくなりました。また、集中力が続かないと感じることもあります。それでも何とか研究活動を維持できているのは、若い頃に積み重ねた経験やアイデアの引き出しがあるからだと思います。これまでを振り返ると、研究テーマそのものだけでなく、「誰と出会ったか」「どのような環境で研究したか」が、その後の研究の方向を大きく左右してきたことを強く感じます。自分では予想していなか

った出会いや機会が次の研究につながり、それがさらに新しい出会いや研究へとつながっていきました。これまでに出会い、ご指導いただいた先生方、共同研究者の皆様、そして研究をともに進めてくれた学生たちのおかげで、これまで研究を続けてくることができたのだと思います。これまで支えてくださった皆様に、心から感謝しています。

今後も、日本の有機地球化学研究のプレゼンスを国内外に示していけるよう、研究成果を発信し続けたいと思います。同時に、学生や若手研究者との交流を大切にし、溶存有機物を専門とする若手研究者をはじめ、有機地球化学分野で活躍する若手研究者を少しでも後押しできるよう努めたいと思います。そして、自分自身の研究だけでなく、周囲の学生や仲間の研究も良い方向へ進むような研究環境をつくっていければと思っています。今回の受賞を一つの節目として、これまでお世話になった多くの方々への感謝を忘れず、これからも新しい研究に挑戦していきたいと思います。

研究奨励賞（田口賞）受賞者決定のお知らせ

2026 年度の研究奨励賞（田口賞）について、学会公示により候補者の推薦を募集した。応募締切り時点（5 月 29 日）で 1 件の推薦があった。選考委員会で応募書類を確認後、オンライン会議により審査を行った。その結果、候補者は受賞者選考規則を満たしており、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいという結論に至ったため、会長に答申した。その後、7 月 13 日の理事会で、理事からの意見を踏まえ、会長が受賞者を決定した。

氏名：　Raman Umamaheswaran（ラマン ウママヘスワラン）

学位：　Ph. D（Geology）

所属・職名：　海洋研究開発機構（JAMSTEC），Young Research Fellow

研究題目：　Investigation of nitrogen-bearing geomacromolecules from fossils: their molecular taphonomy, applications, and future prospects
化石由来の含窒素ジオマクロ分子に関する研究：
その分子タフォノミー、応用、および将来の展望

業績：　国際誌 9 編（1st 著者 7 編）

受賞理由：

Raman Umamaheswaran 会員は、化石中に保存された含窒素生体高分子（タンパク質およびその続成産物）の分子タフォノミー研究を、有機地球化学・古生物化学の新たな展開として精力的に推進してきた。インド工科大学ボンベイ校での博士課程在籍時より、中生代・新生代の多様な生物化石を対象に、化石タンパク質の残存機構と変質過程の解明に取り組み、2023～2025 年には JSPS 外国人特別研究員として北海道大学に在籍した。現在は海洋研究開発機構（JAMSTEC）の Young Research Fellow として研究を継続している。

同会員の研究の大きな特色は、熱分解装置と二次元ガスクロマトグラフ・飛行時間型質量分析計を組み合わせた pyrolysis GC×GC-TOF MS を、化石高分子の構造解析に先駆的に応用した点にある。本手法を鮮新世の菌類化石やコラーゲン模擬実験に適用し、化石高分子の同定・定量を高精度で実現した。さらに、北海道足寄産の古第三紀海生哺乳類の骨化石にも応用し、ステロイドの詳細な記載と保存機構の解明など、古生物学への具体的な成果を挙げている。また、タンパク質の続成変質産物を表す「Proteagen」という新概念を提唱し、生体タンパク質と地圏中で変質したタンパク質を区別する新たな視点を提示した。この成果は 2024 年に Nature Ecology & Evolution に掲載され、分子タフォノミー研究の発展に大きく寄与するものとして高く評価されている。

これまでに査読付き国際誌論文 9 編（うち筆頭著者 7 編）を発表しており、若手研究者として優れた実績を有する。現在はアミノ酸同位体分析などにも研究領域を広げるとともに、日本とインドの研究機関の国際連携にも貢献している。

以上の独創的な研究成果と今後の発展性から、Raman Umamaheswaran 会員は、有機地球化学・古生物化学分野の将来を担う研究者として、研究奨励賞（田口賞）受賞者に相応しいと判断された。

ウママヘスワラン会員からのコメント

It is with great pleasure and sincere gratitude that I receive the conferment of the Taguchi Award (Research Encouragement Award) by the selection committee of the Japanese Association of Organic Geochemists for the year 2026. I am honored by my selection, and I express my heartfelt thanks to the committee and the board of directors. This is the first award I have received as a member of a scientific society recognizing my contributions to research work, and I am deeply humbled by this recognition, especially from a society outside my homeland. My research work focuses on applications of organic geochemistry towards the field of molecular paleobiology. In particular, I have worked on the diagenesis and alteration of proteins in fossils. I co-developed a novel technique using pyrolysis coupled with two dimensional gas chromatography time-of-flight mass spectrometry to detect altered protein fragments in fossils. The results led to a new framework for the interpretation of these altered proteinaceous geomacromolecules as distinct from their biological counterparts, for which I coined the novel terminology ‘proteagen’. I expanded my research into identifying preserved molecular fragments of chitin in fungal fossils, as well as recovery of exceptionally preserved steroids from marine mammal bone fossils from the Oligocene of Hokkaido. Currently, I aim to investigate the discrepancies in organ- specific amino acid nitrogen stable isotope ratios in fishes and am exploring the potential of expanding the application of the results to past ecosystems. I would like to take this opportunity to thank Prof. Suryendu Dutta, who, although not a member of this society, encouraged me to apply for positions in Japan. I would also like to thank Dr. Yoshinori Takano for his constant advice and motivation. I also express my wholehearted gratitude to Prof. Ken Sawada, who accepted me for my first postdoctoral position in Japan, for his constant support and academic mentoring. Finally, I express my thanks once again to the selection committee and the president of the association. I hope that I can live up to the expectations and continue to strive for scientific excellence.

2026 年度年会費納入のお願い

平素より当学会の活動・運営にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。本会の会計年度は 7 月 1 日から翌年 6 月 30 日までとなっており、会員の皆様には当該期間内に年会費（正会員：年額 3,000 円、学生会員：年額 1,000 円）のお支払いをお願いしております。まだお手続きがお済みでない場合は、お早めにお支払いいただきますようお願い申し上げます。

なお、過年度分に未納がある方には、別途メールにてご案内いたしますので、あわせてご対応をお願いいたします。

【振込先】

郵便振替口座：00110-7-76406
名義人：一般社団法人　日本有機地球化学会

＜他行から振り込む場合＞
ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900）
店名：〇一九店（ゼロイチキュウ店）
預金種目：当座
口座番号：76406 （7 桁の番号が必要な場合は頭に 00 を付けてください。）
名義人：一般社団法人　日本有機地球化学会

なお、クレジットカード払いをご希望の場合は、請求書を発行いたしますので、事務局（office_admin@ogeochem.jp)までお申し出ください。
（クレジットカード払いの場合、年会費は手数料を含め、正会員¥3,154、学生会員¥1,079 となります。）

ご不明な点がございましたら、事務局（office_admin@ogeochem.jp）までお問い合わせください。

何卒よろしくお願い申し上げます。

会員・会費担当　山本

EDITOR'S NOTE

先日、中国出張で陝西省にある華山に登ってきました。地殻変動が生み出したダイナミックな地形を肌で感じ、フィールドに赴くことで自然に対する畏敬の念が改めて生まれました。地に足をつけた研究をしていきたいですね！（滝沢）

私事ですが、6 月に第 2 子が生まれました！出産に合わせて人生初の育児休暇を 3 カ月取得しましたが、研究室に所属する学生もいるので大変でした。。。久しぶりの赤ちゃんのお世話ですが、楽しくて仕方がないですね。ずっと抱っこしていたいです(笑)　子供から元気をもらって頑張ろうと思います。（浦井）

10 月 20 日には、JAXA の火星衛星探査計画「MMX（Martian Moons eXploration）」の打ち上げが成功しました。フォボスから持ち帰られる貴重な試料から、どのような新たな成果が生まれるのか。MMX が届けてくれる試料と、その先に待つ発見が、今から待ちきれませんね！（古賀）

表紙写真：　中国・陝西省に位置する「華山（Mt. Hua）」

Organic Geochemistry 第 79 号 （2026 年 10 月 31 日 発行）

発行人

日本有機地球化学会会長 山本正伸
〒060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 5 丁目
北海道大学 大学院地球環境科学研究院 A204 室
電話：011-706-2379

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北 19 条西 8 丁目
北海道大学 低温科学研究所
事務局長 力石 嘉人
電話：011-706-5472（直通）
E-mail: office_admin@ogeochem.jp

編 集

滝沢侑子（北海道大学）
浦井暖史（信州大学）
古賀俊貴（海洋研究開発機構）